第7回シンポジウム『次世代食品機能性と自然免疫 PART2』を開催しました

日　時　平成30年3月23日(金) 13:00～17:45
場　所　笹川記念会館(東京都港区)

我が国が長寿社会であることは誇るべきことでありますが、その一方で、高齢化に伴い医療費が年々増加していることから、超高齢化社会において良好なQOLを保つ対策を具体的に展開することは今後の大きな課題とされており、そのための具体的な取り組みの一つとして、次世代食品機能性に関する研究が広がりを見せております。

こうした動きなどを踏まえ、自然免疫制御技術研究組合では、大きな社会的課題とされている「健康寿命の延伸」に直結する「自然免疫」の果たすべき役割などを多くの皆さまに紹介することを目的とし、内閣府に設置された戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)プロジェクトのアウトリーチ活動として、また、前回の第6回シンポジウム「次世代の食品機能性と自然免疫」の続編として、本年3月23日、第7回シンポジウムを開催いたしました(参加者は、健康食品企業・一般市民など119名)。

当日は、本組合代表理事の杣源一郎氏の開会挨拶、内閣府、農林水産省、経済産業省、(一財)バイオインダストリー協会の来賓挨拶に続いて、間和彦氏(日本製粉㈱イノベーションセンター副センター長)、小林彰子氏(東京大学大学院准教授)、稲川裕之氏(自然免疫制御技術研究組合・SIP研究実施責任者)からご講演を頂いた後、パネルディスカッションが行われました。

間和彦氏

まず、間氏からは、「植物由来機能性食品素材の開発―小豆島産オリーブ由来果実エキスの関節炎予防効果と商品化―」と題し、研究成果を活用した素材・商品開発により、超高齢化社会における日本のロコモ予防への貢献、健康寿命の延伸、高齢者のQOLの向上などを進めていくことなどについて、お話を頂きました。

小林彰子氏

続いて、小林氏から「ロスマリン酸の抗アルツハイマー病効果」と題し、ロスマリン酸の抗アルツハイマー病効果に関わる可能性の高い新たな作用の発見など、ポリフェノールの摂取によるアルツハイマー病予防効果解明の糸口へと繋げていくことを目指して進められている研究内容などが紹介されました。

稲川裕之氏

最後に、本組合のSIP研究実施責任者である稲川氏から「食品のホメオスタシス維持機能多視点評価システムの開発―多視点評価システムの統合プロトコルモデル作成とヒト試験への展開―」と題し、生体内異物を「つくらせない」、「ためない」、「排泄する」を評価する指標として、好中球活性能、食細胞貪食能、酸化LDLを測定することが可能となるシステムの開発が進められており、平成30年度において、ヒト介入試験のデータの蓄積などが進められ、本システムの有用性に関する評価が行われることなどが紹介されました。

この後、講演された3氏をパネリストとし、SIPのSPD(サブプログラムディレクター)である阿部啓子氏(東京大学大学院特任教授)のコーディネートにより、本シンポジウムの主題である「次世代の食品機能性と自然免疫」に関するパネルディスカッションが行われました。

このように、平成26年度から5年計画で取り組まれてきたSIPプロジェクトが最終年度を迎えようとしている中、今回のシンポジウムは、前回と同様、講演からパネルディスカッションに至るまで、内容の濃いものとなり、閉会挨拶では、本組合副代表理事の上田和男氏が、講師ならびに参加者に対するお礼を述べ、終了となりました。